

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 9 月 20 日現在

機関番号：34511  
 研究種目：基盤研究（C）  
 研究期間：平成 21 年度～平成 24 年度  
 課題番号：21530750  
 研究課題名（和文） リハビリテーション病院等における音楽療法の効果判定に関する実践的研究  
 研究課題名（英文） Practical Research Concerning the Evaluation of the Effect of Music Therapy in Rehabilitation Hospitals and Other Facilities  
 研究代表者  
 小原 依子（KOHARA YORIKO）  
 神戸女子大学・文学部・准教授  
 研究者番号：40388319

研究成果の概要（和文）：リハビリテーション病院において、様々な障害の症状や改善にも大きく影響すると言われている「注意」機能に着目し、「注意障害」の改善を目的とし、有効な音楽療法技法・プログラムの選定及び実践を行い、これまでに心身障害・認知症等高齢者対象に開発を行ってきた音楽療法用チェックリスト（MTCL-YK(S)）について「注意障害」対象用への改訂を行った。研究協力者間において、評価のしづらさや問題点の検討を重ね、修正版（MTCL-YK(S)-1,2）を作成し、信頼性・妥当性検証を行いながら、MTCL-YK(DOA)(Music Therapy Check List :Disorder of attention version)の評価表の作成を完成するに至った。

研究成果の概要（英文）：Rehabilitation hospitals consider that the “attention” function significantly influences and helps improve the symptoms of various disorders. Focusing on this function with the aim of examining any improvement to the condition of “attention disturbance,” the researchers selected and applied effective techniques and programs of music therapy for the purpose of revising the Music Therapy Check List (MTCL-YK(S)). This list had been first developed to apply to the elderly with such conditions as cognitive impairment, and to patients with mental or physical disorders; this research revised the list to apply to “attention disturbance.” After the researchers repeatedly examined any problems and the difficulty of evaluation, a revised version (MTCL-YK(S)-1,2) was created, and after verifying its credibility and validity, the evaluation list MTCL-YK(DOA) (Music Therapy Check List: Disorder of attention version) was finally completed.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
平成 21 年度	800,000	240,000	1,040,000
平成 22 年度	700,000	210,000	910,000
平成 23 年度	700,000	210,000	910,000
平成 24 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
総計	2,900,000	870,000	3,770,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：心理リハビリテーション、音楽療法、効果判定、評価法

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 近年、医療面でも注目され、臨床応用されてきている「音楽療法」は、少子高齢社会対策や予防医学、健康増進の推進の動向にも

伴い、福祉、保健、教育場面で大きな広がりをみせている。今後ますます社会への定着を図るには、その効果の科学的裏付けが求められる。とりわけ音楽療法において最も難しい

とされる課題の一つに「効果判定」の問題がある。中でも特に音楽療法の効果を量的に測定する評価手法について、疾患・障害に合わせた評価法として統一されたものは、我が国においては未だ模索段階であり、これらの確立は音楽療法の治療的理論構築がなされていくことの基本的要件であると言える。

(2)そこで、筆者は、これまで音楽療法用に独自の治療構造を反映した項目設定(4件法で各段階に下位項目設定)を行った『音楽療法チェックリスト(MTCL-YK)』の開発に着手し、さらにその対象領域を広げるべく、兵庫県下の19箇所の高齢者施設・病院等で実践研究体制を持ち、認知症等を中心とした高齢者にも対応したMTCL-YK(S)への改訂作業を行ってきた。この評価表を用いて、要介護度別に音楽療法効果をとらえ、その障害状況と適合する音楽療法技法の関係が示唆されるという結果も得ることができた。同時に、多様な疾患・障害に適用可能であることがわかり、現在、リハビリテーション病院等の主に医療領域での幅広い疾患・障害に対する評価表の改訂および開発を目指している。

## 2. 研究の目的

本研究では、心身障害、認知症等を主とした高齢者領域で開発を行ってきた「音楽療法用評価表(MTCL-YK(S))」を用いて、リハビリテーション病院等の医療領域においても適用可能な評価表として改訂・開発を行う。

## 3. 研究の方法

### (1)医療領域における音楽療法実践対象者及び技法の実態・文献調査と整理と、本研究で実施する音楽療法プログラム・技法の選定

研究協力者と会合をもち、より有効な音楽療法プログラム・技法を吟味・選定し、本研究で実施していく実践内容を確認、決定した。

### (2)MTCL-YK(S)の妥当性・信頼性検証と修正案1(MTCL-YK(S)-1)の作成

音楽療法実践が開始された現場において、MTCL-YK(S)を用いて、約3ヶ月間、音楽療法の対象者個人についての評価を行い、音楽療法の効果検証と、評価のしづらさや問題点を明らかにし、評価表使用に際しての視点・視座を統一した。

問題点としてあがった点について、臨床心理学、音楽療法でのそれぞれの専門家間で検討を重ね、下位項目あるいは数量化手法についての修正案(MTCL-YK(S)-1)を作成した。

### (3)MTCL-YK(S)-1の妥当性・信頼性検証と修正案2(MTCL-YK(S)-2)の作成

さらに厳密な信頼性検証を行うために、音楽療法実践の録画映像を、研究協力者間で同

時に視聴し、行動観察を行った。その評価をMTCL-YK(S)とMTCL-YK(S)-1で行い、評価車間における評価結果のズレを比較した。

その後、さらに音楽療法を約3ヶ月実施し、問題点としてあがった点についての整理を行い、修正案MTCL-YK(S)-2を検討した。

### (4)修正案(MTCL-YK(S)-2)の検討と、注意障害対象用音楽療法チェックリスト

#### (MTCL-YK(DOA): Music Therapy Check List(Disorder of attention version)の確定

MTCL-YK(S)-2について、さらに研究協力者間で下位項目について検討を行い、修正案MTCL-YK(DOA)を作成した。そして、最終確定のため、評価表の「修正前」(MTCL-YK(S))と、(1)で作成された「修正後」(MTCL-YK(DOA))を用いて評価を行い、評価者間のズレが減少しているかどうかを数量的に分析した。

## 4. 研究成果

### (1)医療領域における音楽療法実践対象者及び技法の実態・文献調査と整理と、本研究で実施する音楽療法プログラム・技法の選定

医療領域における音楽療法実践の文献検索や、実地見学を通して、リハビリテーション病院における音楽療法の有効性として、「パーキンソン病」と「注意障害」において、特に音楽療法実践の重要性・有効性が認められたこと、また、2つの疾患・障害は、評価の際にも大きく異なる点があり、それらをとらえられる指標を作成する必要性が明らかとなったため、MTCL-YK(S)の評価表についても2つを分けて作成することとなった。

中でも、まず音楽療法のプログラム・技法が確立途上である「注意障害」に焦点をあてて、検討することとした。

「注意障害」対象の音楽療法プログラム・技法(高次脳機能障害 注意障害対象)については、神経学的音楽療法(Thautら)の「持続的注意」「選択的注意」「転導的注意」「配分的注意」への治療改善を目的とした、「音楽的注意コントロール訓練」(MACT)、「音楽による半側空間無視トレーニング」(NMT)、「聴覚認識トレーニング」(APT)などから検討し、以下のように設定した。

#### ① 歌唱

- ・1曲を最後まで歌う
- ・拍を刻みながら歌う
- ・交互唱
- ・同時唱

#### ② リズム楽器

- ・音楽に合わせて一定のリズムを持続して打つ
- ・指示により鳴らす順番やポイントを意識して打つ
- ・競合する音刺激に集中して演奏を続ける

- または切り替える
- ③ 旋律楽器・伴奏楽器
- ・メロディーの演奏、または引き歌いをする
  - ・指示された箇所でコードボタンを押さえる
  - ・歌いながら順次進行で演奏する  
(ヘルマンハーブ、オートハーブなど)
- とした。
- 音楽療法セッションは週に4回、1セッション40分、形態は個別音楽療法で実施した。

**(2) MTCL-YK(S)の妥当性・信頼性検証と修正案1 (MTCL-YK(S)-1)の作成**

MTCL-YK(S)の全20項目は表1の通りで、(1)で確認されたプログラムを約3ヶ月間実施し、MTCL-YK(S)のセッション開始時と終了時の得点比較を行ったところ、M(音楽場面)( $t(23)=-7.51$ 、 $p<.001$ )、P(対人場面)( $t(23)=-5.02$ 、 $p<.001$ )、M-P(共通項目)( $t(23)=-2.21$ 、 $p<.05$ )において、有意な上昇が認められ、音楽療法技法・プログラムの有効性が実証された。そして、本プログラムを用いて、さらに3ヶ月間、音楽療法を実施しながら、「注意障害」対象のセッションにおけるMTCL-YK(S)の評価の問題点を明らかにし、(MTCL-YK(S)-1)を作成した。

表1

M-P (共通項目)	M (音楽場面)	P (対人場面)
G (認知機能) H (身体機能)	M-A (積極性)	P-A (積極性)
	M-B (持続性)	P-B (持続性)
	M-C (協調性)	P-C (協調性)
	M-D (情緒性)	P-D (情緒性)
	M-E (歌唱)	P-E (verbal)
	M-E(I) (歌唱・意欲)	P-E(I) (verbal・意欲)
	M-F (楽器)	P-F (non-verbal)
	M-F(I) (楽器・意欲)	P-F(I) (non-verbal・意欲)
	M(I) (音楽場面・意欲)	P(I) (対人場面・意欲)

**(3) MTCL-YK(S)-1の妥当性・信頼性検証と修正案2 (MTCL-YK(S)-2)の作成**

MTCL-YK(S)-1についての妥当性・信頼性検証を行うため、研究協力者間(4名)で注意障害ケース対象の同一音楽療法セッション記録映像を用いて、MTCL-YK(S)での評価と、MTCL-YK(S)-1での評価において、評価者間の評価得点のズレ(得点の分散)がどのように変化しているか検証したところ、分散の平均値は、 $\sigma^2=0.23$ (MTCL-YK(S))から $\sigma^2=0.20$ (MTCL-YK(S)-1)に減少が見られ、ズレが小さくなっていることが明らかとなった。さらに、共通項目、音楽場面、対人場面別に分析したところ、共通項目( $\sigma^2=0 \rightarrow \sigma^2=0$ )、音楽場面( $\sigma^2=0.21 \rightarrow \sigma^2=0.23$ )、対人場面

( $\sigma^2=0.26 \rightarrow \sigma^2=0.18$ )となり、音楽場面においては、ズレが大きくなっていることがわかった。そのため、再度、3ヶ月間音楽療法を実施し、特に音楽療法場面を中心に、評価における問題点を検討し、MTCL-YK(S)-2を作成した。

**(4) 修正案(MTCL-YK(S)-2)の検討と、注意障害対象用音楽療法チェックリスト**

**(MTCL-YK(DOA)の確定と今後の展望**

**① MTCL-YK(DOA)の確定と今後の課題**

MTCL-YK(S)-2について、さらに研究協力者間で、検討を行い、修正案MTCL-YK(DOA)を作成した(表2)。そして、最終確定のため、評価表の「修正前」(MTCL-YK(S))と、「修正後」(MTCL-YK(DOA))を用いて評価を行い、評価者間の評価得点のズレが減少しているかどうかを数量的に分析した。その結果、分散の平均値は、 $\sigma^2=0.13$ (MTCL-YK(S))から $\sigma^2=0.12$ に減少が見られ、さらに共通項目( $\sigma^2=0 \rightarrow \sigma^2=0$ )、音楽場面( $\sigma^2=0.13 \rightarrow \sigma^2=0.09$ )、対人場面( $\sigma^2=0.17 \rightarrow \sigma^2=0.17$ )という結果が得られた。MTCL-YK(S)-1では、音楽場面での評価者間の評価得点の分散が大きくなっていたが、MTCL-YK(DOA)では、減少していることが明らかとなり、妥当性が高まったことが示されたと言えよう。

今回、当該病院における入院状況から、MTCL-YK(DOA)を用いて、他の心理検査結果との相関分析、及び、長期的な音楽療法効果の測定をすることができなかったが、今後はMTCL-YK(DOA)を用いて、データ蓄積を実施していきたい。そして、このチェックリストをもとに、「パーキンソン病」に適用可能なバージョンの作成を行っていく予定である。

**② 期待される研究成果の意義**

我が国で報告されている評価表は、各対象領域あるいは各臨床現場に限定された内容の域を出ていないのが現状であり、幅広い対象領域に対応した評価表の確立が待たれるという状況にある。そのため、今回のように、評価表の適用対象を広げることで、多領域で実施されている音楽療法効果についての比較が可能となり、多様な疾患・障害への音楽療法実践プログラム・技法の特定(臨床応用モデル構築)につながることを期待される。このことは、音楽療法の専門性、さらには独自の理論的裏付けの基盤を確立する一助になると考える。

表2 MTCL—YK(DOA) (Music Therapy Check List—YK (Disorder of Attention version))

	1	2	3	4
<b>G(認知機能)</b>	セッションの内容をほとんど理解できない	セッションの内容を少し理解できる	セッションの内容をだいたい理解できる	セッションの内容を十分理解できる
<b>H(身体機能)</b>	自分で体を動かすことがほとんどできない	自分で体を動かすことが少しできる	自分である程度体を動かすことができる	自分で思うように体を動かすことができる
<b>I(注意機能)</b>	たえず注意が散乱する	しばしば注意が散乱する	ときに注意が散乱する	注意が散乱することはない

他の疾患・障害との違いをアセスメントのポイント  
 □右側を知っていることがよく見られる  
 □左側のマツが見られる  
 □ゆっくりとした動作に合わせられない(pacing)  
 □状況にあった表情変化が見られない  
 □声響け強

	1	2	3	4
<b>M-A(積極性)</b>	ほとんど活動に参加しない	少し活動に参加する	だいたい活動に参加する	熱心に活動に参加する
<b>M-B(持続性)</b>	ほとんど活動が見られない	少し活動が見られる	だいたい活動が見られる	常に活動が見られる
<b>M-C(協調性)</b>	周囲にほとんど合っていない	周囲に少し合っている	周囲にだいたい合っている	周囲によく合っている
<b>M-D(情緒性)</b>	情緒表現がほとんど見られない	情緒表現が少し見られる	情緒表現がある程度見られる	情緒表現が豊かに見られる
<b>M-E(歌唱)</b>	歌唱活動がほとんど見られない	歌唱活動が少し見られる	歌唱活動がある程度見られる	歌唱活動がよく見られる
<b>M-F(楽器)</b>	楽器の操作がほとんど見られない	楽器の操作が少し見られる	楽器の操作がある程度見られる	非常に意欲が感じられる
<b>M-G(音楽場面意欲)</b>	意欲がほとんど感じられない	やや意欲が感じられる	ある程度意欲が感じられる	非常に意欲が感じられる

	1	2	3	4
<b>P-A(積極性)</b>	ほとんど参加しない	少し活動に参加する	だいたい活動に参加する	熱心に参加する
<b>P-B(持続性)</b>	ほとんど活動が見られない	少し活動が見られる	だいたい活動が見られる	常に活動が見られる
<b>P-C(協調性)</b>	周囲にほとんど合っていない	周囲に少し合っている	周囲にだいたい合っている	周囲によく合っている
<b>P-D(情緒性)</b>	情緒表現がほとんど見られない	情緒表現が少し見られる	情緒表現がある程度見られる	情緒表現が豊かに見られる
<b>P-E(Verbal)</b>	言葉・声による交流はほとんど見られない	交流が少し見られる	交流がある程度見られる	自分からよく交流する
<b>P-F(non-verbal)</b>	身体・行動による交流はほとんど見られない	身体・行動による交流が少し見られる	身体・行動による交流がある程度見られる	自分からよく交流する
<b>P-G(対人場面意欲)</b>	意欲がほとんど感じられない	やや意欲が感じられる	ある程度意欲が感じられる	非常に意欲が感じられる

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 3 件)

- ① 小原依子、前田潔、中澤清：認知症等の高齢者を対象とした音楽療法の効果に関する実践的研究－チェックリスト (MLCL-YK(S)の開発及び音楽療法の短期効果・長期効果を中心に－、神戸女子大学 文学部紀要 第 46 巻、pp83-97、2013. 3、査読有
- ② 小原依子、前田潔、中澤清：認知症等の高齢者を対象とした音楽療法の効果に関する実践的研究 (第 I 報)－長期的な音楽療法の効果を中心に－、近畿音楽療法学会誌 vol. 11、pp160-167、2013. 2、査読有
- ③ 河村美帆、小原依子：重症心身障害を伴う A 氏への音楽療法の試み～コミュニケーション手段拡大を目指して～、近畿音楽療法学会誌 vol. 10、pp68-75、2012. 3、査読有

6. 研究組織

(1) 研究代表者

小原 依子 (KOHARA YORIKO)  
神戸女子大学・文学部・准教授  
研究者番号：40388319

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

( )

研究者番号：

(4) 研究協力者

大串 智恵 (OHGUSHI CHIE)  
兵庫県立リハビリテーション中央病院・音楽療法士

梶田 美奈子 (KAJITA MINAKO)  
兵庫県立リハビリテーション中央病院・音楽療法士

渡邊 幸子 (WATANABE SACHIKO)  
兵庫県立リハビリテーション中央病院・音楽療法士

河村 美帆 (KAWAMURA MIHO)

神戸女子大学 大学院・研究生 (音楽療法士)